The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1940年代 ： 「東南アジア」誕生の兆し ： 近代的諸概念の学習と日本の軍事的進出
Author(s)	赤木, 攻
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1994, 4, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《1940年代の東南アジア》

1940年代：「東南アジア」誕生の兆し

－近代的諸概念の学習と日本の軍事的進出－

赤　木　　攻

はじめに

小稿の目的は、1940年代の東南アジア時代像の簡単なスケッチを提供することである。

ところで、若い時代に100メートルを14秒で走ったことがあると、今でもそのくらいで走ることが可能であると思うことが間々ある。過去の姿で現在の姿を判断してしまう例である。その逆で、ものごとの現在の姿を、過去からそうであったように考えてしまい、過去を間違って捉えてしまうこともよくある。異なる時代のものを混同するという意味で、そうした現象を時代錯誤とかりに呼ぶならば、「東南アジア」も後者の場合の時代錯誤の対象として恰好な例といえよう。

今日、「東南アジア Southeast Asia」なる表現は世界中で一般的に使用され、日常的なタームとして定着している。そうしたタームの使用が時間感覚を麻痺させ、「東南アジア」の存在を疑問視することは少ない。「東南アジア」の古い時代からの存在が無意識的に前提とされて、論議が進んでいく。また、少し古い時代を論じる際にも、現在の「東南アジア」がその時代にも存在していたかのように錯覚してしまうきらいがある。

1940年代は、そこで、大きな意味を持ってくる。なぜなら、1940年代は東南アジアにとって高い分水嶺で、1940年代を越えたところに「東南アジア」が見え始めてくるからである。つまり、「東南アジア」誕生の兆しが見えたのは1940年代であり、それ以前に「東南アジア」は存在しなかった。

従って、1940年代以前の長い東南アジアの歴史の中に「東南アジア」を探し出

すことはできない。確かに、東南アジアには古来多様な民族が在住し多様な小権力社会を形成してきた。ムアン、ヌガラなどといった前近代的国家がその代表である。風土に大きく影響された社会がそれぞれ独自の文化を育み、交易や移動や戦役を通じて相互に関係しつつも比較的孤立して存在していた。しかし、そうした営みの中からは「東南アジア」という地域概念や文化、さらには有機的統一体は生まれなかった。少なくとも外から押し寄せてくる文明や文化に対抗できる性格のものはなかった。外文明または外圧に長い間翻弄され続け、主体性が全くといっていいほど育ちにくかった地域である。古くは、インド文明と中国文明の波に洗われ、17世紀からはこの地域に進出してきたヨーロッパ文明の力に従属する形となり、20世紀初頭にはほんの一部（現タイ国）を除いて全地域が植民地化してしまった。

1940年を迎えたばかりの東南アジアは、ヨーロッパ列強が支配する植民地体制に満ち満ちていた。そこには、「東南アジア」の気配は全くといっていいほど無かった。

しかし、1940年代は、こうした強固な植民地体制が崩壊し、「東南アジア」が誕生する出発過程を用意していた。その重要な契機としては、２つあげることが可能である。

１つは「民族」、「国民」または「国家」といった近代的国家概念に関わる知的学習とその応用としての民族運動や独立運動、さらには法律整備などであり、もう１つは西欧植民地体制を崩した「日本軍」のこの地域への展開（太平洋戦争）である。

この２つの契機は、独立国とはいいながら経済的にはヨーロッパ列強の支配下にあったタイにとってもほとんど同じであった。1940年代のタイをリードした一人の人物が深く関わったことがらを通して、その辺りを簡単に確認してみたい。

1　ワンワイタヤーコーン親王

1932年６月の「人民党革命」により絶対王制期に終止符を打ち立憲君主制時代を迎えたタイでは、1940年代から50年代にかけて人民党主導のもとに議会制の定

着を目指した新しい政治が様々な困難をともないながらも試行された。プラヤー・パホンポンパユハセーナー（首相在任、1933～38）、ピブーンソンクラーム（同、1938～44、1948～57）、クワン・アパイウォン（同、1944～45、46、47）といったこの時期の主要政権下にあって、ほとんどの閣議に同席し後見役としてその時期の政治運営に大きな役割を果たした人物の存在は、意外に知られていない。その人物は、王族出身の外交官、知識人のワンワイタヤーコーン親王である。同親王のプロフィールは、次の通りである[1]。

ワンワイタヤーコーン・ウォーラワン親王（欽賜名クロマムーン・ナラーティップポンプラパン、1891～1976）は、ラーマ4世王（1804～68）の孫に当り、父はナラーティッププラパンポン親王（1861～1931）である。1891年8月25日、バンコクに生まれる。1905年には、国費留学生〈ナックリエン・ルワン〉[2]に選ばれ、イギリスへ向かう。Marlbonrough College に5年間学び、10年からオックスフォード大学（Balliol College）で歴史学を修める。15年、パリの Ecole Libre Des Sciences Politiques に移り、外交学に専念する。学業を終えるや否や、17年にはパリのタイ国大使館に三等書記官として勤務する。3年間の勤務の後、タイに帰国し本省勤めとなる。22年には、ラーマ6世王により枢密院顧問官に任ぜられる。24年、外務次官に就任し、懸案の不平等条約の改正のための準備作業を精力的に進める。26年、駐イギリス大使に転出し、国際連盟タイ代表を兼務するなど、国際外交舞台で活躍する。30年には帰国し、チュラーロンコーン大学文学部教授として教壇に立つ。33年にパホン内閣が成立すると、総理府顧問、外務省顧問に就任する。その当初は諸外国との不平等条約改正に尽力する。太平洋戦争中の43年に、東京での「大東亜会議」にピブーンの代理として出席したことは、わが国でもよく知られている。45年には上院議員に任命される。46年には戦後最大の外交課題である国連加盟交渉に携わり、成功に導く（46・12・6加盟）。47年、駐米タイ大使として赴任し、国連タイ代表を兼任する。52年には外務大臣に就任。その後、SEATO の閣僚会議タイ代表（54年）、バンドン会議タイ代表（55年）、第11回国連総会議長（56年）などを勤め、積極的タイ外交を展開する。59年にはサリット政権の副総理に迎えられる。軍部支配下の重苦しい雰囲気の中、タマサート大学学長に就任し（65年）、学術活動の活性化を支援する[3]。国王代理として大

阪万博にも出席（70年）する。その他、王立学士院院長や Siam Society 会長も長年つとめ、タイの教育界や学界に大きく貢献する。1976年9月5日永眠、享年85才。

2　近代的諸概念の学習と用語の策定

ラーマ3世王時代に「西欧の衝撃」を受けて以来、タイ王室はその対応に終始追われ続けたといってもよい。タイ王室の独占貿易に終止符を与えた4世王時代の「ボウリング条約」締結（1855）や1892年に始まるラーマ5世王主導下の政治改革は、そうした西欧へのタイの対応の積極的側面である。一般に認められているように、タイが植民地化を逃れ得たのは、タイを暖衝地帯にするという英仏の植民地宗主国のこの地域をめぐる共通利益が重要な要因ではあったが、チャクリー王室の長期にわたる賢明な対応にも相応の要因があった。しかし、その対応はあくまでも絶対王制を軸としており、そこには限界があった。近代的国民国家、代表制原理、三権分立制といった新しい国家体制に対応できる知的蓄積は、当然のことながら、まだ充分には用意できていなかった。

だから、絶対王制を打倒し立憲制をもたらした1932年6月24日の「人民党革命」直後、新しい政治権力の安定化はもちろんのこと、立憲制を支える知的対応において混乱が生じたのは無理もない。なかんずく、タイ語には本来説明用語は豊富であるが、新体制にともなう近代的諸制度や概念を的確に表現する用語が欠けていた〔Sanit : 106〕とくに、独立した領域国家としての制度的法律的未整備は、タイが国際的舞台に上がるには大きく不利に働いた。

「人民党革命」から1カ月も経ない7月15日に、チュラーロンコーン大学でヨーロッパ留学帰りの気鋭の学者ワンワイタヤーコーン親王が行なった講演の題目は「憲法〈ラッタタマヌーン〉」で、それまで続いてきた絶対王制が終焉し新しく立憲君主制が開始したという時代の変革を聴衆に明確に覚らせる内容であり、新聞各紙もその斬新な講演内容を記載したほどであった〔Phairot : 22-23〕。また、政府は6月27日に公布された「仏暦2475年臨時サヤーム国統治憲章」に代わるタイ最初の本格的憲法の起草作業に着手したが、その審議段階で発表された草案に

ついて、ワンワイタヤーコーン親王は次々と批評を加えていった。新聞紙上で、「国民」、「国家」、「民族」、「副署」などの用語として適切なタイ語は何かを中心に解説し、草案を批評した。起草が終了し、その年の12月10日に公布された「仏暦2475年サヤーム王国憲法」には、親王の意見があちこちに取り入れられていた〔Sanit : 107-117〕。それ以降、タイには「ラッタタマヌーン〈憲法〉」なる用語が定着したが、この用語もワンワイタヤコーン親王が英語の Constitution の訳語として考えだしたものであるという〔Phairot : 23〕。

1993年6月20日のクーデターで、保守化したマノーパコーンニティターダー政府を打倒し、議会制度の立て直しに着手したパホン政権がワンワイタヤーコーン親王に首相顧問および外務省顧問として政権運営に協力を要請した理由は、親王の西欧とタイの両方の社会に対する深い知識であった。西欧とタイの二つの文化＝言語を操れる存在が必要であった。パホン政府は国会に対して審議の場に親王同席の特別許可を求めたが、この「バイリンガル」は法案審議の過程で政府の強力な武器となった。

近代概念の学習の必要性を充分に認識していたパホン政府は、1933年に「仏暦2476年王立学士院法」を制定し、学術の振興をはかるための国立の機関として「王立学士院」を発足させ、ワンワイタヤーコーン親王を院長に任命した。30年代は予算の制約もあり活動は充分ではなかったが、1942年に改革されてからはタイの学術振興を支えた。1947年に駐米大使として赴任するまで副院長のプラヤー・アヌマーンラーチャトーンらと協力して、王立学士院の最も重要な仕事として用語の策定〈バンヤット・サップ〉に力を入れた。

ワンワイタヤーコーン親王は、ヨーロッパから帰国した1919年ころから既に用語策定に関心を持っていた、理由は、外務省に所属しており、当時から国家的課題とされていた諸外国との不平等条約の改正、その裏付け作業としての民法や商法を中心とした国内法の整備が進行しており、すぐれた「バイリンガル」で貴重な人材であった親王はこの作業に関わり合いを持たざるを得なかったからである。その辺りの事情や親王が最初に知恵を絞って考えた用語は reparation に対応するタイ語であること、policy, order, system, regime, revolution, reform, evoluton, culture などの具体的例をあげ、タイ語の策定の上で意味はもちろん

のことリズムなどをも考慮しなければならないことなどを、親王は「タイ語用語の策定」と題する小文などで自ら述べている [Narathip:73-83]。また、親王の夥しい著作に目を通せば、親王が英語やドイツ語など西欧諸語とタイ語、サンスクリットなどへの深い造詣と外交に関する広い知識の持ち主であることを容易に知ることが可能である[4]。「タイの柳田国男」ともいわれる知識人アヌマーンラーチャトーンも、親王の近代的知性、および用語策定作業への熱心さとタイ語とタイ文化の質の向上への貢献を高く評価するとともに、「文化 culture」に当初〈プルッティタム〉を当てたが、不評で根付かないので〈ワッタナタム〉に変えたなどその作業の困難さの一面を述懐している [Sathienkoset:19-23]。

ワンワイタヤーコーン親王が考案した用語の一部を表にしてみた。一覧して、近代的「国家」ないしは「社会」が必要とするキー用語＝概念の行進であることがわかる。これらの用語のほとんどは、今日では普通のタイ語として定着しているが、各用語に注がれた知的エネルギーは計り知れない。1940年代、タイはワンワイタヤーコーン親王に代表される知性を軸に、「国民国家」または「民族国家」へ向けて必死に知的基盤の整備に努めたのである。

ワンワイタヤーコーン親王が考案した用語の例

๑. กัมมันตภาพรังสี	Radio-Activity	๑๖. ประสิทธิ์	Effect
๒. ข้อคิด	Thought	๑๗. ประสิทธิผล	Effective
๓. ความคุ้มกัน	Immunity	๑๘. ปรัชญา	Philosophy
๔. จักรภพ	Commonwealth	๑๙. ปฏิวัติ	Revolution
๕. ณรงค์	Campaign	๒๐. ปฏิรูป	Reform
๖. โทรภาพ	Telephoto	๒๑. ปฏิกรรม	Reparation
๗. โทรทัศน์	Television	๒๒. ผลิต	Produce
๘. โทรพิมพ์	Teletype	๒๓. ผันผวน	Turmoil
๙. นโยบาย	Policy	๒๔. พัฒนาสังคม	Social Development
๑๐. บรรษัท	Corporation	๒๕. พัฒนา	Develop
๑๑. บริการ	Service	๒๖. มโนธรรม	Conscience
๑๒. ประชาชาติ	Nation	๒๗. มโนภาพ	Concept
๑๓. ประชากร	Population	๒๘. มวลชน	Masses
๑๔. ประชาคม	Community	๒๙. รัฐศาสตร์	Political Science
๑๕. ประสิทธิภาพ	Efficiency	๓๐. รัฐธรรมนูญ	Constitution

๓๑.	ระบบ	System	๖๑.	จินตนาการ	Imagination
๓๒.	ระบอบ	Regime	๖๒.	จุดยืน	Standpoint
๓๓.	ระเบียบ	Order	๖๓.	บรรณารักษศาสตร์	Library Science
๓๔.	วัฒนธรรม	Culture	๖๔.	สันทนาการ	Recreation
๓๕.	วารสาร	Journal	๖๕.	พลศึกษา	Physical Education
๓๖.	วารสารศาสตร์	Journalism	๖๖.	สามัคคีจิต	Esprit de Corps
๓๗.	วิกฤต	Critical	๖๗.	วิทยาลัยเขต	Campus
๓๘.	วิสาหกิจ	Enterprise	๖๘.	ศัพท์ตำรา	Bookish Term
๓๙.	ศิลปศาสตร์	Liberal Arts	๖๙.	ศาสตร์ภาวะแวดล้อม	Environics
๔๐.	สหรัฐ	United States	๗๐.	นามสงเคราะห์	Directory
๔๑.	สหภาพ	Union	๗๑.	มลพิษ	Pollution
๔๒.	สาธารณรัฐ	Republic	๗๒.	มลพิษทางทะเล	Marine Pollution
๔๓.	สหพันธ์	Federation	๗๓.	มลพิษทางอากาศ	Air Pollution
๔๔.	สังคม	Social	๗๔.	ภาพลักษณ์	Image
๔๕.	สมาพันธ์	Confederation	๗๕.	วงครรภดนตรี	Chamber Music
๔๖.	สังคมสงเคราะห์	Social Work	๗๖.	หัสดนตรี	Musical Comedy
๔๗.	สื่อมวลชน	Mass Media	๗๗.	จิตใจเอื้อสาธารณะ	Public Spirit
๔๘.	สื่อสารมวลชน	Mass Communication	๗๘.	คณะลัทธินิยม	Sect
๔๙.	สถาบัน	Institution, Institute	๗๙.	นิกาย	Denomination (Religions)
๕๐.	เสรีภาพ	Liberty	๘๐.	สิ่งตัวอย่าง	Sample
๕๑.	สัญญลักษณ์	Symbol	๘๑.	ปุถุชน	Layman
๕๒.	วิทยาศาสตร์	Scientific	๘๒.	จิตใจสูง	High Mindedness
๕๓.	องค์การ	Organization	๘๓.	ใจรักแรง	High Spirit
๕๔.	อภิสิทธิ์	Prerogative	๘๔.	อาคันตุกะไมตรี	Guest Friendship
๕๕.	เอกสิทธิ์	Privilege	๘๕.	กำหนดรายการ	Schedule
๕๖.	โฉมหน้า	Aspect	๘๖.	โภคทรัพย์	Consumption Goods
๕๗.	โฉม	Shape	๘๗.	ดุษฎีนิพนธ์	Dissertation
๕๘.	รูปโฉม	Figure			
๕๙.	ภาพ	Image			
๖๐.	มโนภาพ	Conception			

出所：Wanwaithayakon:pp.32-35.

3　タイ・仏印国境紛争

東南アジアに満ち満ちていた植民地体制に大きな打撃を加えたのは日本であった。1937年から日中戦争に突入していた日本は次第に戦域を南方に拡大し、1941

年には大東亜共栄圏建設を旗印に東南アジア全域に軍を展開し、植民地勢力との戦闘に突入した。いわゆる太平洋戦争である。この太平洋戦争は、結果的には、長年の東南アジアの植民地体制を根底から覆した。東南アジアにおける日本の緒戦の電撃的勝利は、この地域の人々の西欧観を大きく変えてしまった「リー・ポーピン：114－115」。疑ってもみなかった白人の敗北は、東南アジアの人々に西欧に勝てること、つまり政治的独立を果たし植民地の桎梏から抜け出す希望を与えたのであった。日本の敗北で太平洋戦争が終わるや否や、各地で独立宣言が行なわれ、西欧植民地勢力が再帰したところでは独立のための闘いが様々な形で続行した。

非植民地国であったタイでは他の地域ほど深刻な事態ではなかったが、やはり、日本の軍事的進出と敗北を充分に配慮した外交を展開したことは周知のことである。ここでは、日本の進出が東南アジアに大きな影響をもたらした例として、ワンワイタヤーコーン親王との関わりが強かった1940年代はじめの「タイ・仏印国境紛争」を簡単に取りあげることにする。

ワンワイタヤーコーン親王は、太平洋戦争の最中である1943年の6月に『タイ文化：タイ外交史』と題する著作を発表している〔Wanwaithayakon：61-123〕。それに拠れば、タイ外交の真髄は「独立の確保」であると序で述べ、この「タイ・仏印国境紛争」もそうした視点で捉えている。

1937年のスイスから1938年のポルトガルまでの主要15国との間の治外法権などを内容とした友好通商条約の改正に成功したタイは、文字どおりのこの地域の独立国家として威信高揚につとめ始めた。1938年に始まるピブーン政府が掲げた「民族創生〈サーン・チャート〉」政策はそうした延長線の上にある。その政策の一端であるフランスとイギリスとの領土交渉に中心的役割を果たしたのは、ワンワイタヤーコーン親王であった。1939年のヨーロッパでの戦争突入に対応して、東西をフランスとイギリスに挟まれていたタイは、急遽1940年6月12日両国との間に相互不可侵条約を締結するが、ヨーロッパ戦線でのドイツの進撃を背景に、ラーマ5世王時代に失った領土（現在のカンボジア、ラオス及びマレーシアの一部）の返還を内容とする領土交渉を両国に同時に要求した[5]。イギリスとの間には合意が成立するが、フランスとの間はこじれ紛争に発展した。10月8日にはチュ

ラーロンコーン大学学生約３千人が反仏デモを繰り広げ、10月20日にはピブーンソンクラーム首相がラジオで国民に向けてこの問題で大演説を行ない、フランス側の不当性を糾弾した〔Rong:140-147〕。11月28日にはついに交戦常態になり、ナコーンパノムなどメコン河沿いでフランス軍の空爆が開始された。タイ側の戦死者は160名に達した〔Rong:149〕。これが「タイ・仏印国境紛争」である。

この紛争に着眼し、介入し決着をつけたのは日本であった。既に北部仏印に進駐し、さらなる南進を狙っていた日本は、緒戦で形勢不利なタイ側からの隠密裡の依頼もあり、勢力拡大の好機と捉え、この紛争の調停を買って出た。本国がドイツの占領下にあり弱体化していたフランスは、日本の圧力に受け入れざるを得なく、翌41年１月28日本の要請により休戦が実現した。調停交渉は２カ所でなされた。停戦交渉がサイゴン港に停泊中の巡洋艦名取で、和平協定交渉は東京で各々行なわれた。前者は41年１月31日、後者は41年５月９日に調印されるが、その内容は明らかにタイ側に有利なものであった。つまり、日本は意図的にタイ側に組したのであった。メコン河右岸と現カンボジアの一部の失地回復に成功したタイは、全土が歓喜の渦に包まれ、ピブーンは英雄としてあがめられ、タイ族の併合主義をも匂わせた「民族創生」政策が頂点に達した時期であった〔Wright:106-111〕。ちなみに、今日タイを訪れる国賓が必ず献花するバンコク市中の「戦勝記念塔」は、この「勝利」を記念して41年６月24日の「タイ民族の日」にピブーンが定礎したものである。

ワンワイタヤーコーン親王は、この「タイ・仏印紛争」の全過程においてタイ側の中核的役割を果たした。とりわけ、東京の和平交渉にタイ代表として出席し活躍したのは親王であったことはそれを物語っている。また、ピブーンが1943年の大東亜会議に出席を渋り、代理として親王を東京に送り込んだのも、この時の活躍と切り離すことはできない。

この紛争は、1940年代のごくはじめに生じた事件であるが、1940年代初頭における東南アジアでの日本の行動の先駆的例であろう。タイの民族主義政策に日本の拡張主義政策がうまく乗り合わせ、宗主国フランスを屈服させたのである。それは、西欧植民地勢力の東南アジアからの駆逐であり、日本の南進政策のスタートと捉えることが可能である。実際、この事件の直後から日本は東南アジアに本

格的に進出し、結局は太平洋戦争へ突入していくのである。そして、周知のように、東南アジア各国で強固な基盤を築いていた植民地体制を崩壊させていった。タイは、ワンワイタヤーコーン親王のいう「独立の確保」という国是を基本に日本の東南アジア進出を利用し、フランスに領土の回復を要求し成功したのである。

おわりに

1940年代の東南アジアでは、1930年代からの継承として、「民族主義」、「国民国家」、「領域国家」、「独立」、「法治主義」といった近代的主権国家についての学習が進み、西欧植民地勢力の後退という好機を利用して学習成果を生かすべく独立領域国家を樹立することに力が注がれた。それは、脱植民地化の初期過程といってもよい。インドネシア共和国（独立宣言1945年８月、独立49年12月）、フィリピン共和国（1946年７月）、ビルマ連邦（1948年１月）などが独立したのを始め、多くの地域で独立への運動が展開し、それまで植民地であった地域にひとつの有機的な結合体が誕生するほのかな兆しを示した。もっとも、「東南アジア」という表現のみは1940年代に確立し、その表現が意味する地理的範囲もほぼ合意されたが、その内容はまだまだ空疎で「東南アジア」と呼べる実質的姿は見えなかった。つまり、1940年代は、それ以降今日まで続いている「東南アジア」という統一体の形成過程の真に最初のわずかな部分を担当したのである。

〔注〕

1）ここでは、次のものを参考にした。Pikthip Malakun "Phraprawat（御履歴）" *Chumunum niphon phua thawai phrakiat phontri phrachaoworawongthoe Kromamun Narathipphongpraphan*, 1963, pp,(25) − (95). *Narathipphong-praphan*（ナラーティップポンプラパン親王）（葬儀本）1976.

2）1871年、近代化のための人材養成を目的としてラーマ５世王が自らの費用で青年をヨーロッパに派遣した。その留学生を「ナックリエン・ルワン」と呼んだことに始まる。赤木攻「タイ国の近代化過程における海外留学──絶対王制との関連において──」『国

立教育研究所紀要第94集』昭和53年3月、215～230頁。

3）1960年代のはじめのサリット政権下で、スラック・シワラックなどの新世代が『社会科学評論』を中心に活動を行えたのも、親王の支援があったからである。赤木攻『タイ知識人の苦悩』井村文化事業社、1984、287～290頁。

4）ワンワイタヤーコーン親王の著作は、次のものが参考になる。*Khai kham lae kho wicha*（用語解説評論）Satirot Kanhadun, 1943. *Withayasaranukurom*（用語辞典）Phraephitaya, 1962. *Chumunum phraniphon khong than Wan*（ワンワイターヤーコーン親王著作集）Phadung suksa, 1965. *Wannaniphon*（ナラーティップポンプラパン親王著作集），Samakhomsangkhomsat haeng prathet Thai, 1975. *Chumnum Phraniphon khong satsatrachan Phontri Phrachaoworaeongthoe Kromamunnarathipphongpraphan*（ナラーティップポンプラパン親王御著作集）Thanakan kurungthep, 1979.

5）ラーマ5世王時代の領土交渉など、タイにおける国境の確定については、赤木攻「タイの国の『国境』確定――近代的主権国家の成立過程」矢野暢編『東南アジアの国際関係』弘文堂、平成3年、125～140頁を参照にされたい。

〔引用文献〕

リー・ポーピン：「外国の浸透　マレーシアの視座から」猪口孝編著『アジア太平洋の戦後政治』朝日新聞社、1993、111～143.

Narathip : *Wannaniphon*（ナラーティップポンプラパン親王著作集），Samakhom sangkhomsat haeng prathet Thai,1975.

Phairot : Phairot Chainam, Sadetnaikrom Narathipphongpraphan（ナラーティップポンプラパン親王）" *Narathipphongprphan*, 1976, pp.21-30.

Rong : Rong Sayamanon, *Prawatsat Thai nai rabop ratthathanmanun*（立憲制下のタイ史）Thaiwatnaphanit,1977.

Sanit : Sanit Charoenrat, Khwamlag khrang roem rabopmai（新体制開始時の思い出）" *Chumunum niphon phua thawai phrakiat phontri phrachaoworawongthoe Kromamun Narathipphongprphan*, 1963, pp.101-141.

Sathienkoset : Sathienkoset, Ruang banyat sap （用語策定のこと）*"Chumunum niphon phua thawai phrakiat phontri phrachaoworawongthoe Kromamun Narathipphongprphan*, 1963, pp.19-34.

Wanwaithayakon : *Narathipphongpraphan* （ナラーティップポンプラパン親王）（葬儀本）1976.

Wright : Joseph J. Wright Jr. *The Balancing Act A History of Modern Thailand* Pacific Rim Press, California, 1991.

The 1940's :A Sign of the Birth of "Southeast Asia"
—Absorption of Modern Concepts and Japanese Military Attack—

Osamu AKAGI

The aim of this short paper is to sketch roughly the 1940s' image of Southeast Asia. Nowadays the term or expression of "Southeast Asia" is used generally in the world. So few people doubt of the existence of "Southeast Asia" world. They argue each other about many problems on the assumption that "Southeast Asia" had been existed from old days. But we can not find out the " Southeast Asia" in the long history of Southeast Asia before the 1940's, which was a watershed for this area. Southeast Asia in the end of 1930's was filled with a perfect colonial order, so that there was no sign of "Southeast Asia" as an area unit.

The 1940's characterized by the collapse of colonial order prepared the starting process of "Southeast Asia" formation through the two important factors. One was the efforts to absorb modern key concepts such as nation, nation-state or the principle of national self-determination

and to apply their concepts to actual political process such as independent movements or reformation of law system. The other was the Japanese military attack over this area, which precipitated the ruin of a colonial order.

These two factors have the same effect on Thailand that was placed under the economic control of the Western powers, even though she politically stood on her own legs. We can confirm it through the various activities of H.R.H. Prince Wan Waithayakon, Krommamun Naradiph Bongsprabandh (1891-1976), an outstanding statesman, diplomat and intellectual, who played a leading role in the 1940's. He was among the few members of the "bilingual" who were familiar with both Western and Thai cultures. He was ready to take an active part in shaping modern nation. One of his major contributions to the nation was the coinage of Thai terms, which express exactly Western modern concepts or institutions, such as policy, order, system, regime, revolution, culture and constitution. And he served his country in a number of important diplomatic missions. One of the notable milestones was the negotiations about Thai-French Indochina boundary dispute in 1940-41 and the participation in the peace conference hosted by Japan in Tokyo. The settlement of this dispute favorable for Thai by the Japanese mediation was a sign of the following Japanese military penetrations to Southeast Asia, which resulted in a fall of strong and long colonial order in this area.

In the 1940's there were serious efforts to found independent nations by learning from modern nation-states and by taking advantage of the collapse of Western colonial rule within this area. New nation-states such as the Republic of Indonesia, the Republic of the Philippines and the Union of Burma were founded one after another, which gave a very dim sign of the birth of "Southeast Asia" as an organic unity. The 1940's was

important to mark a starting point for the formation of organic unity called "Southeast Asia" , which have been going on till now.